

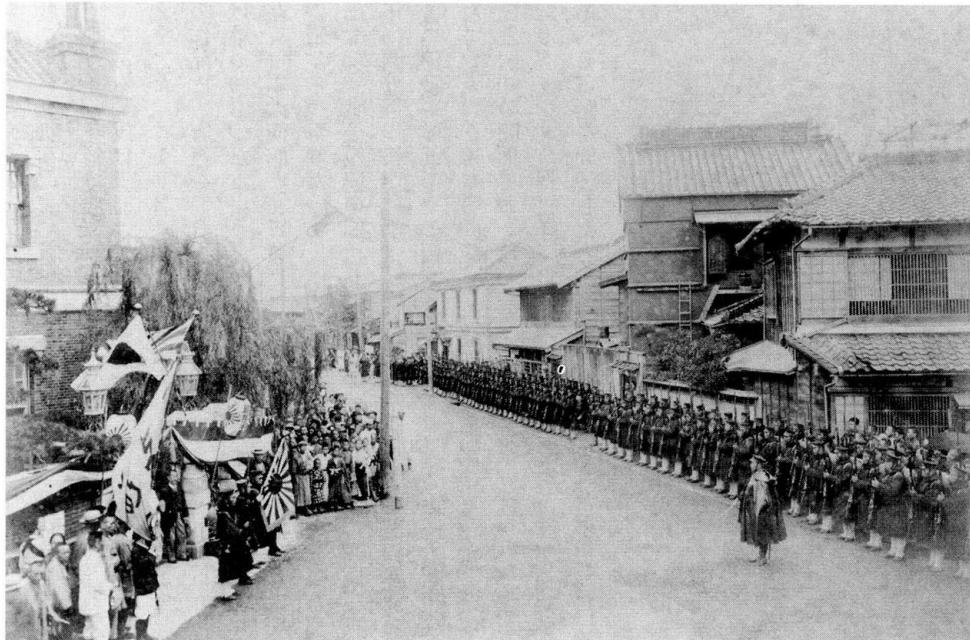
NEWS

開港のひろば

編集・発行／横浜開港資料館
〒231-0021 横浜市中区日本大通3番地 電話(045)201-2100
ホームページ <http://www kaikou city yokohama jp/>

Number
68

発行日／平成12年5月3日(水)
印刷／中川印刷株式会社



日露戦争時の軍人出征風景（添田有道氏蔵）

企画展

「歴史資料への招待 —受け継がれた横浜の記憶—」

昭和五六年（一九八二）六月一日に横浜開港資料館が開館して今年で一九年目をむかえます。その間収集した資料は、現在約二〇万点になりました。今回の展示では、資料がどのように受け継がれたか、どのような資料が残されたかをキーワードに、寄贈・寄託を受け、あるいは複製を作成した様々な資料をとおして一九世紀から二〇世紀の横浜の歴史を振り返ります。

巻頭の三頁では、展示資料の中から主なものを紹介します。上の写真は鶴見区の旧家添田家に残された古写真で、日露戦争時の横浜市街地の様子を撮影したもので、写真には、

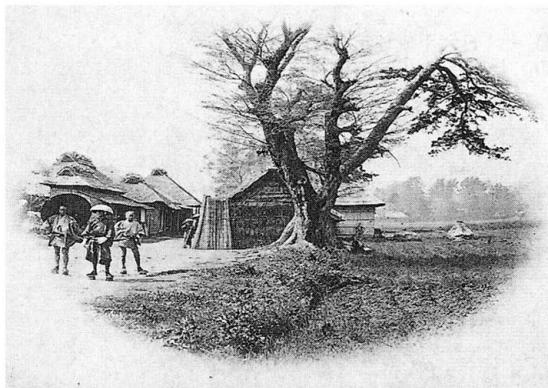
「明治三七年出征軍人（横浜港ヨリ乗船ス）、横浜市尾上町五丁目高島嘉兵衛氏前、同氏宅ハ連隊本部」と添書きがあります。日露戦争は、ご承知のとおり明治三七年（一九〇四）から翌年にかけて、朝鮮と満州の支配をめぐって日本とロシアの間で戦われた戦争です。『横浜開港五十年史』（明治四二年 横浜商業會議所）によると、戦時における軍人の送迎は全国到る所で盛んに行なわれましたが、横浜市民ほど熱心なのはなかつたようです。皇族を始め陸・海軍将校の出征・凱旋に際しては、平沼・神奈川駅に送迎の群衆が潮の如く押し寄せ、平沼停車場近傍には、市民各団体の休息所、臨時飲食店の種類が限りもなく設けられ、往来は昼夜別なく大混乱を極めたと記されています。写真是、そのような出征軍人を戦場に送り出す時の一齣です。門前の提灯には、「連隊本部」の字が見えます。見送りの人々が比較的軽装なのに対して、百人を越す兵士たちは皆外套を着て、いかにもこれから北に向かうという様子がうかがえます。『横浜開港五十年史』によれば、横浜市民の約六千人が出征し、そのうち二八九人が亡くなり、約一千人が負傷したそうです。この時何人が無事に帰還したのでしょうか。

この写真のほかにも震災で失われた旧市庁舎の建築中の写真、建設中の横浜船渠の写真など、六枚の写真を添田家から借用して展示します。

（上田由美）

企画展

歴史資料への招待 —受け継がれた横浜の記憶— 展示資料から



**バロウズ氏寄贈
写真家ベアトの幕末日本アルバム**

昭和三二年五月一八日、イギリスからF・D・バロウズ氏夫妻が横浜を訪れた。明治四〇年から関東大震災まで絹織物の貿易に従事していた人で、横浜上陸五〇年目の記念として来日したのである。氏は二冊のアルバムを携えていた。イギリス人写真家ベアトの作品で、震災を免れ、父親から受け継いだものだという。氏はそれを在英日本大使館と在日英國大使館に寄贈するつもりだった。

当時横浜市では、戦後復興の節目として、翌年に開港百年祭が計画され、新市庁舎の建設や横浜市史の編集も進められていた。そんな雰囲気のなかで、氏と旧知の間柄であったホテル・ニューグランドの野村洋三社長が横浜市への寄贈を要請したと

「バロウズ氏旧蔵写真帖による」として「生麦事件現場」が掲載されている。アルバムは市史編集室が保管し、現在はその資料を継承した当館に保存されている。雪ダルマの芯のような、当館の古写真コレクションの核となつた資料である。岡本の作成した複製も、他の資料とともに、遺族の滋氏から当館に寄贈され、オリジナル・アルバムと同じ収蔵庫に収納されている。(斎藤多喜夫)

▲アルバムの中の一枚、「生麦事件の現場」

ころ、懐かしい横浜の「復興の役に立てば」ということで、一冊は横浜市へ、もう一冊は英國大使館へ寄贈されることになった。「一八日に贈呈式が行われ、平沼亮三市長に手渡された。

この時アルバムの複製を作成する仕事を委託されたカメラマンが岡本三郎であった。岡本は明治四二年、開港五〇年祭に沸く横浜で、老舗の玉村写真館に入つて修行し、開港百年祭に列席することを目標に横浜市に横浜屈指の版元として、明治二年の後、関東大震災の記録写真や報道写真、婚礼写真から商業写真、官庁からの依頼による記録写真と、幅広く活躍した。この時も新市庁舎の建築工事を撮影中だった。

横浜に移住後は、絵地図・外国語学習書・商番付・教科書副読本などを刊行した。なかでも、自ら筆をとった絵地図の刊行では、「絵師」「絵地図師」と呼ばれるほどの名声を得たといふ。

明治三年(一八七〇)には、「横浜全図」「五味文庫二一一三三」と「横浜案内絵図」「同二一一〔1〕」を刊行し、その後新たな地図や改訂版などを次々と刊行した。富五郎は明治二六年(一八八三)に死去するが、死の翌年にも「改良横浜全図」「五味文庫二一五四」が刊行されている。

生前だけではなく死後も版を重ねた富五郎の絵地図は、その後の絵地図作成に大きな影響を与えた。

富五郎は、絵地図の他に、語学入門書の刊行にも、力を注いだ。「外國商通ことば附」「和本一四七」・「真草英語選」「和本一九二」などで

**尾崎富五郎作
「横文字いろは並に英語」・
「諸商人通用符帳」**

一五味文庫から

漢文字	日本字	英語
ア	ア	A
ヒ	ヒ	B
シ	シ	C
リ	リ	D
ト	ト	E
チ	チ	F
リ	リ	G
カ	カ	H
モ	モ	I
オ	オ	J
ヌ	ヌ	K
ヌ	ヌ	L
ヌ	ヌ	M
ヌ	ヌ	N
ヌ	ヌ	O
ヌ	ヌ	P
ヌ	ヌ	Q
ヌ	ヌ	R
ヌ	ヌ	S
ヌ	ヌ	T
ヌ	ヌ	U
ヌ	ヌ	V
ヌ	ヌ	W
ヌ	ヌ	X
ヌ	ヌ	Y
ヌ	ヌ	Z

諸商人通用符帳
支那語
英語
日本語
漢文

また富五郎が明治一二年に刊行した「商業取組評」「五味文庫一〇一〇」は、東京の商人名鑑として有名であるが、ほぼ同時期に刊行された「諸商人通用符帳」「五味文庫一七一四五」も、富五郎の商業に対する興味と知識がうかがえる、貴重な刊行物である。

なお富五郎については、石橋正子氏の「錦誠堂尾崎富五郎出版目録(稿)」(『出版研究』二三号)を参考にさせていただいた。ここで紹介した富五郎の出版物については、請求番号を「」で示したので、閲覧室で御覧いただきたい。(石崎康子)

資料を伝える當み

—大湖太一氏保管文書

「公有記録図面目録書」から—

明治十一年（一八七八）、三新法が公布され、各村には戸長が置かれた。以後、村内の衛生・土木・教育などの村政一般は戸長が担うこととなつた。神奈川県は明治十一年十一月、戸長の職務内容を通達しているが、その第十二条には「諸帳簿保存管守の事」とある。更に十三年三月、『町村公有記録取締手続』（乙第四十七号布達）が出されている。その趣旨は、

①町村公有の記録類は戸長が管理・保存すること

②毎年新規に作成された記録類は翌年二月迄に目録を作成すること

③戸長交代の際には、引継目録を作成して記録類を引き継ぐこと、

下の写真は、岡村（現磯子区）の戸長、谷知治兵衛が管理していた

「公有記録図面目録書」六冊である。明治十三年九月の目録書には、

一、大政官御布告 拾冊
一、改正徵兵令 拾冊
一、本県御布達 拾冊

一、院省便御布告 拾冊
一、改正徵兵令 拾冊

といった具合に、上級官厅からの布達集をはじめ、江戸時代に作成された古文書類、明治政府が提出させた社寺明細帳の控など、合計二十四種、百十九冊分の書類が列举されている。

目録の末尾には、「右は当村公有の

記録図面」であり、先述の県乙第四十七号布達を受けて取調べたものである、と記されている。同様の形態をとる目録書が他に四冊（十四年一月、十五年一月、十六年一月、十七年二月）ある。

残る一冊は、明治十六年二月の目録書で、これは乙第四十七号布達の規定（戸長交代の際の引継）に沿って作成されたものである。戸長谷知は、四年の任期を終えてなお再任されたが、こうした場合にも、引継目録は作られていたのである。

このように、岡村戸長の谷知治兵衛は、岡村の記録類を「公有記録」として保管していた。岡村は明治十二年、屏風浦村の大字となる。しかし岡村の文書類のいくつかは、その後農業委員らの手で交代管理され、現在横浜開港資料館に収蔵されている。まさに先人たちの「資料を伝えよう」となっている。

（松本洋幸）



横須賀製鉄所図面

—堤家資料から—

堤家資料は、磯子区の旧家堤家に伝存したもので、日本で最初に石鹼製造に成功した十代当主磯右衛門に関する資料が多く含まれている。磯右衛門の石鹼製造については広く知られているが、彼は、幕末から明治時代初年にかけて、石鹼製造以外のさまざまな事業（品川台場や神奈川台場の建設、横須賀製鉄所の建設、灯台で使用する点灯用の油の製造など）に従事していた。

そのため、同家には、これらの事業に関する記録が多数残されることになった。なかでも、慶應年間（一八六五～六八）に幕府が創設した横須賀製鉄所（造船所のこと）で、後の横須賀海軍工廠にあたる）の建設工事にに関する記録や明治初年の製鉄所に関する記録には珍しいものが多い。

当時、磯右衛門は、製鉄所の建設資材の調達や職人・大工の監督などに従事し、製鉄所建設予定地の埋立工事や建物の建築、さらには家具の設計にも携わっていた。こうした工事は製鉄所の運営を幕府から委嘱されたフランス人技師の指示によって行なわれ、堤家には、この時に作成された設計図面や埋立に関する図面が残っている。

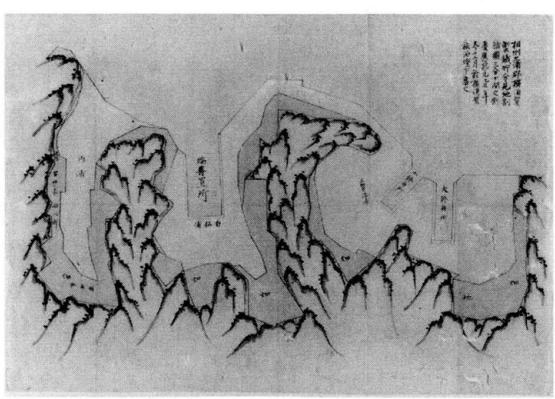
既に、同家資料については『開港のひろば』五四号で詳しく紹介したことがあるが、今回、紹介する図面は、その後、所在が確認されたもの

である。図面は、全部で約五十点あり、製鉄所建設のために実際活用されていたものと考えられる。

左の絵図は、そうした図面のひとつで、慶應元年（一八六五）二月に、磯右衛門が横須賀の宿で描いた製鉄所建設予定地の図面である。

この図面のように作成年代まで記されたものは少ないものの、これらは、日本人がどのように西洋の技術や文化を取り入れたのかを教えてくれる。なかには、製鉄所の責任者であったヴェルニーの住居の設計図面、フランス人医師住居の雪隠絵図、食器台の図面などもあり、興味は尽きない。（なお、図面を含む堤家資料は、今年度中に寄託を受け、当館で公開する予定になっている。）

（西川武臣）



「フランス士官が見た明治のニッポン—L.クレットマン・コレクションから」



若き日のクレットマンの肖像写真
ルイ・クレットマンは一八五一年、アルザス地方のストラスブルグに生まれた。父親は壁紙製造業者であった。一八七〇年にエコール・ポリテクニックに入学し、工兵学を学び、七二年に卒業。写真はその頃の撮影と言われる。二〇歳前後である。来日するのは、この五六年後の七六（明治九）年のことであった。

ムからとくに貴重と思われるものを七点選んで紹介したが、今回もそれにつづけて、展示開催中あきらかになつたことや展示で紹介できなかつた資料もふくめて紹介したい。なお掲載写真はすべてルイ・クレットマン・コレクションからである。

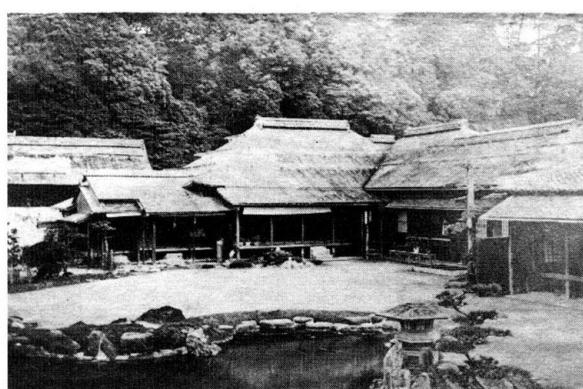
「小田原で海岸線を離れ箱根に向かう山道になりました。人力車で行くことができるのは小田原から一里



クレットマンは、来日した一八七六年（明治九）年四月、「イチバンめの旅行」として、箱根や小田原、さらに足をのばして熱海や伊豆大島、沼津などを訪れた。箱根には行きだけなく帰りにも立ち寄っている。クレットマンはフランスの家族であつた。



東山手から大浦居留地を写した写真である。左手奥に南山手が見えるが、大浦天主堂まではとらえられて



まで、三枚橋のたもとまで快適にたどり着くと、流れを渡り、人力車から駕籠に乗り換えなければなりませんでしたが、血のにじむような苦労をして歩いて行く方を選んでいます。ヨーロッパ人がとても喜びそうな楠の木箱です。

蛇かご

クレットマンは川に設置された蛇かご（左の写真の右手前に写っています）に関心をもった。蛇かごとは、丸く細長く粗く編んだ竹かごのなかに石を詰めて、河川の堤防とした日本

の伝統的な工法である。発祥の地は中国であり、奈良時代に日本に渡來したと言う。

今まで、三枚橋のたもとまで快適にたどり着くと、流れを渡り、人力車から駕籠に乗り換えなければなりませんでしたが、血のにじむような苦労をして歩いて行く方を選んでいます。ヨーロッパ人がとても喜びそうな楠の木箱です。

初めて目にしたクレットマンは、フランスへの書簡（一八七六年四月二二日付）につぎのように記した。

「大磯の川には橋が架かっていないので、渡し舟で渡らざるをえませんでした。雪解けの頃には並外れた増水となり、川幅は一キロほどになります。身を守るために日本が用いる方法はひどく幼稚なもので、竹で編んだ大きな円筒形のかごで堤防を築くというものです。一五〇メートルの幅に並べたかごに大きな石をいっぱい入れ、ソーセー

ジのように積み重ねていくのです。一五〇メートルの幅に並べたかごに大きな石をいっぱい入れ、ソーセー

長崎の大浦居留地

初めて目にしたクレットマンは、

同展示は、おもな出陳資料であつたルイ・クレットマン撮影・収集写

真がさまざまな方面の関心をえ、四月三〇日無事、終了した。また、会期中の四月四、一一両日には、同資料保管者のピエール・クレットマン氏がマルセイユからご一族とともに来日され、展示をご観覧くださいました。

前回の「開港のひろば」六七号紙上では、クレットマンの写真アルバムからとくに貴重と思われるものを七点選んで紹介したが、今回もそれにつづけて、展示開催中あきらかになつたことや展示で紹介できなかつた資料もふくめて紹介したい。なお掲載写真はすべてルイ・クレットマン・コレクションからである。

畠宿の茗荷屋の庭園
畠宿名主であつた茗荷屋の屋敷内

の庭園。畠宿は、湯本から芦ノ湖畔の箱根宿に達する街道の間宿として賑わつた。江戸末期から寄木細工は特産品として有名である。

まで、三枚橋のたもとまで快適にたどり着くと、流れを渡り、人力車から駕籠に乗り換えなければなりませんでしたが、血のにじむような苦労をして歩いて行く方を選んでいます。ヨーロッパ人がとても喜びそうな楠の木箱です。

いない。クレットマンは一八七六年（明治九）年八九月に横浜から長崎への船旅を楽しんだ。写真はその時に撮影したものと思われる。

クレットマンは美しい長崎の町に好印象をもち、つぎのようにフランスに書き送った（一八七六年九月六日付）。

「長崎湾はナポリよりもはるかに美しい湾だと思います。湾は十分に深く、高い丘がその周囲を巡っています。ナポリほどよごれていず、悪臭もしません」

また、長崎造船所も訪れ、建設中の立神第一ドックの重要性も記しています。町の家々は丘の山腹に階段状に建てられていて、同様に庭や樹木が周囲を巡っています。ナポリほどよごれていず、悪臭もしません」

銀座煉瓦街の竹川町（現在の銀座七丁目）にあった横浜毎日新聞社東京出張所の一八七六年（明治九年）年の写真である。『横浜毎日新聞』は七〇（明治三年）年に横浜で発刊された日本で最初の日刊邦字新聞であったが、七九（明治一二）年一月に『東京横浜毎日新聞』と改題し、編集局も横浜から東京に移っていく。やがて銀座の中心地、銀座四丁目交差点に移り、沼田



横浜毎日新聞社の
東京出張所

間守一社長のもとで改進党系の全国紙へと発展した。

中央棟建築中の陸軍士官学校

陸軍士官学校は、市谷本村町（現、新宿区）の尾張屋敷跡地に建てられた。現在の陸上自衛隊市谷駐屯地である。写真左上に写っているのが、建築中の陸軍士官学校中央棟である。

新棟の開校は、クレットマン離日後の一八七八（明治一）年一〇月であった。

ものではありませんが。しかし周辺諸国に海外遠征をしなければならないヨーロッパ諸列強にとり、日本軍は無視できない存在です。かれらはわれわれの連隊と同様、相当な演習をこなし、わが工兵第一連隊よりも射撃は上手です。わたしが恥ずかしくなるほどです」

以上、紹介したクレットマンからフランスの家族あて書簡は、ピエール・クレットマン氏がすでに翻刻・編集し、二年間の日本滞在一八



▶中央がピエール・クレットマンさん

クレットマンの孫のマルセイユから來館

マンが使用した一八八一年頃のマルセイユ市街地図の寄贈を受けました。

七六年一八七八八年』(Deux ans au Japon, 1876-1878) (二巻) という題で一九九五、九六年に刊行されている（私家版）。

なお、ルイ・クレットマン収集・撮影写真は、総数約五〇〇点にのぼるが、その内、今展示で紹介できたのは一二〇点にすぎない。

現在、当閲覧室で複製で全面公開できるように手続きをすすめている。公開の準備が整い次第、おってお知らせします。

（中武香奈美）

—地方名望家と明治天皇の死、乃木大将の殉死

—近刊『佐久間權藏日記』第2集から—

当館では、近代鶴見地域の名望家の日記『佐久間權藏日記』第一集に引き続き、現在第二集（明治四十四、四十五年）の編集を進めている。

四十四年三月末、鶴見では機関車の煤煙が沿線の肥料小屋に飛火し、折からの強風に煽られ百五十戸を焼失する大火が起きた。佐久間家は奇跡的にこの火難を遁れたが、同年の日記は、どうした訳か六月八日以降は空白となっている。

翌四十五年は明治最後の年となる。

この年四月、近年映画で話題となつた豪華客船タイタニック号の沈没があり、五月には南極探検の白瀬中尉が帰国、と悲喜こもごものニュースが流れた。そして、七月二十日天皇重態との宮内省発表、続いて死去、皇太子の践祚式、乃木大将夫妻の殉死と、慌ただしく時代は明治から大正へ代わった。明治天皇の死と乃木の自殺は各方面に様々な影響を与えた。森鷗外は、乃木の死からわずか五日で『興津弥五右衛門の遺書』を書き上げた。夏目漱石は、大正三年の新聞連載小説「先生の遺書」（同年『ころ』と改題して出版）で、友人を裏切って死に追いやった苦しみから逃れるきっかけを、天皇の死とそれに続く乃木の殉死に見いだし、先生を「明治の精神に殉死」させることで締括った。

ここでは、日記を通じて、佐久間とその家族が天皇の死から喪儀までの一連の出来事をどう受けとめたか、また地域の人々はどう対応したのか

を探つてみたい。

皇上陛下御大患ノ号外來ル

日記に天皇病氣の記事が初出する

のは七月二十日。朱筆で「午後皇上陛下御大患ノ号外來ル、突然ノ報ニ

テ衆大ニ憂惧ス、右記事ニヨレハ去

ル十五日頃ヨリ胃腸ノ御病ニテ十九

日ニ至リ御發熱四十度五分、脈搏百

〇五、呼吸卅八ニテ糖尿病ト脳ヲ

イタメノ由、何卒御平癒ヲ祈ル」と

ある。佐久間家に当時の号外は残つ

ていないが、翌日の新聞に再録され

た内容は、二十日午後十時三十分宮

内省発表「天皇陛下には去る十四日

腸胃に少しく御故障あらせられ十五

日御嗜眠の傾きあり、十八日来御睡

眠一層加はり御食氣御減少午後より

御精神御恍惚の御状態にて御脳症あ

らせらる」云々。同日午後二時には、

宮内省から天皇の病歴（日露戦争の

頃に糖尿病、次いで慢性腎臓炎を併

発）、及び尿毒症との診断結果が公

示された。二十一日付各紙朝刊は、

「聖上陛下御不例」（横浜貿易新報・

時事新報）、「天皇陛下御重態」（万

朝報）、「聖上陛下御重態」（東京朝

日新聞）の大見出しを掲げた。一般

国民はもちろん、大方の政府高官に

とっても寝耳に水の突然の事件であつた。

この日から、各紙社会面のトップ

に、宮内省の容態発表記事が一段と

大きな活字にルビ付きで詳細に報道

された。時事新報社では東京市内各

所に掲示板を設置して宮内省発表の

号外を掲出し、日本橋の白木屋・三

越呉服店や上野の松坂屋呉服店など

では、店頭や店内に容態書を貼り出

した。宮内省では、発表を一日三回

から五回に増やし、新聞各社は号外

を出して速報態勢を取つた。横浜で

は、市長や知事が急ぎ参内し、在郷

軍人会は伊勢山皇大神宮に病氣平癒

の祈願文を奉読し、市役所では市民

の記帳を受け付けた。

喜一憂し、村会議員や総持寺の後援者として地域の寺社で挙行される回復祈願行動に参加していた。

シャイニ、ストック氏の型

この間新聞各社は、宮内省発表を

最大洩らさず掲載して刻々と変わる

天皇の病状を伝え、回復を願う国民

各層の姿を、例えば二重橋前で頭を

垂れる女学生の姿を写真入りで紹介

した。宮内省の発表は、体温・脈拍

数・呼吸回数のほか、身体各部の状

態、食事の内容や摂取量、排泄物の

量や形状に至るまで詳細にわたつた。

殊に、二十六日正午の「御呼吸は不

規則にしてシャイニ、ストック氏の

型に類似」との発表に関連し、各紙

は、専門家にシャイニ・ストック氏型

の呼吸とは何か（小刻みで微細な呼

吸から深く大きな呼吸へ、そして一

時停止というサイクルを繰返すもの

という、またその危険度を語らせ、「シャイニ型御呼吸は頗る危険」（某専門医談、横浜貿易新報・二十七日）、

「必ずしも危険性にはあらず」（高木

兼道談、国民新聞・同日）と様々な

談話を掲載して読者の目を引き付けた。

のち永井荷風は、『断腸亭日乗』

の中で、大正天皇の病状報道が日々

の飲食物や排泄物の如何まで詳細を

極めていると述べ、「これ明治天皇

崩御の時より始まりし事なり。當時

国内の新聞紙はその筋の許可を得て、

明治帝は尿毒症に冒されたまひ、龍

顔変じて紫黒色となれりといひ、ま

日	月	年
一	三	九
二	四	十
三	五	十一
四	六	十二
五	七	十三
六	八	十四
七	九	十五
八	十	十六
九	十一	十七
十	十二	十八
十一	十三	十九
十二	十四	二十
十三	十五	二十一
十四	十六	二十二
十五	十七	二十三
十六	十八	二十四
十七	十九	二十五
十八	二十	二十六
十九	二十一	二十七
二十	二十二	二十八
二十一	二十三	二十九
二十二	二十四	三十
二十三	二十五	

天皇の死 明治45年7月30日

たシャイネス・ストック云々の如き医学上の専門語を交へて絶命の状を記したり。世人はこれらの記事を読みて徒にその報道の精細なるを喜びしもの如し。然れども余をして言はしむれば、これ國家の一大事にして、我國古來の伝説はこの時全く破棄せられしものなり。君主に対する詩的妄想の美感を傷ること甚しきものといふべし」（大正十五年十二月十四日）と書いた。荷風の天皇觀は詳らかにしないが、洪水のような天皇記事の押し付けに対する反発と、報道の倫理を問い合わせる新聞批判であつたろう。

そして、三十日午前零時四十三分死去、一時に皇太子の践祚式、同二十五分に天皇の死亡が宮内省から発表された。この日の日記は「嗚呼今日ハ如何ナル日ゾ」と書き出し、「陛下ハ早ク先帝ニ別レ十七歳ニシテ践祚セラレ、維新ノ大業ヲナサレ爾来幾度ノ内乱ヲ経テ遂ニ日清日露ノ大戦ニ大勝ヲ得テ今日国勢隆々東洋ノ覇者タルニ至リシハ、偏ニ陛下ノ御英俊ト御鴻徳ノ致ス所ニシテ、皇祖以来ノ明君ニシテ世界ニ比類ナキ聖帝ナリ、宝算六十有一歳、痛哭謹記」と朱筆で記した。

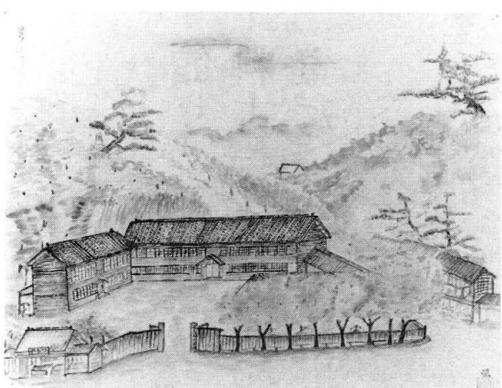
翌三十一日から五日間の廃朝（天

皇が公務を行なわないこと）と、その間の歌舞音曲停止の勅令が出された。新聞紙面には、白木屋や三越、松屋、丸善などの臨時休業に加え、喪章店の新たな広告が目立った。

乃木大将夫婦：殉死
喪儀の翌早朝、乃木大将夫妻自殺の号外が人々を驚かした。九月十四日の日記に、「早朝号外ニテ乃木打タレシ如キ感ニテ涙禁ジガタシ」との追慕の情を吐露している。この碑は、鶴見・東寺尾の有志者により明治三十九年十月に建立された忠魂碑で、現在花月園競輪場入口左側台地に現存するという。その場所は、かつての生見尾小学校の裏山辺りと推定される。直接に面会し言葉を交わした人であり、その突然の殉死とな

八月十二日鶴見の杉山神社で大正改元の奉告祭が、同月二十八日に總持寺で明治天皇（前日追号が発表）の奉悼祭が行なわれた。佐久間家では、午後から十五日（日曜）まで休業し、長男の道夫は總持寺の奉送団に加わるため上京した。佐久間は、同夜生見尾小学校での遙拝式に参列し、翌十四日未明、消防夫や小学生徒、在郷軍人団、家族とともに鶴見駅に程近い線路際で靈柩車両を見送った。日記に「ホームノ北方ノヘンヨリ徐行トナリ十分ニ御車ヲ拝スルコトヲ得タリ、此ノトキニ同ハ最敬礼ヲナシテ直ニ頭ヲ上ケ御柩車ヲ仰拝スレハ第四番目ノ御柩車ハマドノ幕ヲ透シテ御靈柩幽ニウツリ、カナシミト敬愛ノ念ハ胃ニセマリ長ヘニ陛下ニ御別ル、カト思ヘバ何トモ云ヘヌ頭ニナレリ、ア、陛下ノ御鴻業四海ヲ敵フヲ追想シテ涙数行此ノ印象ハ永ク々々頭ニヤドレリ」と感慨を記した。靈柩車が青山坂停車場を出発したのは十四日午前二時、鶴見駅通過は三時二十六、七分頃という。

將軍ヲ欽慕シテ葬送セシナリ、將軍並ニ令夫人ノ柩ニ対シ余ハデンキニ打タレシ如キ感ニテ涙禁ジガタシ」との追慕の情を吐露している。この碑は、鶴見・東寺尾の有志者により明治三十九年十月に建立された忠魂碑で、現在花月園競輪場入口左側台地に現存するという。その場所は、かつての生見尾小学校の裏山辺りと推定される。直接に面会し言葉を交わした人であり、その突然の殉死とな



生見尾小学校 吉川栄次郎氏画

大正4年に増築された木造2階建の村立尋常高等生見尾（うみお）小学校、現横浜市立東台小学校。裏山の根元に「忠魂碑」が描かれている。

家人一同健全・ヨキ暮シ
トス
佐久間家では、賀状を候「大正二年元旦／武州ツルミ駅／佐久間權藏」の書式で投函し（十二月二十八日）、村内の年礼をやめ店飾りを見合させた（同三十日）。が、当年の歳末も、例年通り得意先を廻っての売掛代金の清算や貸借金の清算、諸親類へ贈物の使者を出したり、贈物を貰ったりと慌ただしく過ぎた。大晦日の日記には、「本年ハ田方モ少々ノシケ作ニテ米ハタカシ、家人一同健全先ヅ々々当家ニトリテハヨキ暮シトス、明年ハ一層幸福ヲ得ンコトヲ祈願シ茲ニ目出度本年ヲ送クレリ」と書いた。佐久間には、一家の大黒柱として日々家族の幸福を願い、生業に勤しむ大方の人々と同様、天皇の死も乃木の殉死も既に過去の出来事となつてい

新聞万華鏡①

新収新聞から

日本商事新報

日本商事新報

昨年度、磯子区の脇沢家より六六タイトル、一、一一五点の新聞が寄贈されました。これらの新聞は、脇沢家の先代故脇沢襲作氏の元に残されたもので、いずれも大正一二年（一九二三）の震災直後から昭和二〇年代までのものです。襲作氏が実業家であったので商況報告の新聞が全体の約四割を占め、傍ら区画整理委員、土地価格調査委員等の公職を歴任していたため、震災復興をめぐる土地関係の記事を載せるものが多く含まれています。

『神奈川新報』

牧内福四郎が社長を務める神奈川新報社が明治四一年（一九〇八）三月に創刊、月三回発行しました。寄贈されたのは、三二一号（大正一三年五月二〇日）です。出版地は、横浜市青木町字栗田谷二一六九番地の同社仮事務所になっています。紙面の上部には、「議論は公平報導は正確」と記されており、内容は米国の排日問題、横浜市の復興問題、県

横浜開港資料館では、横浜の歴史を明らかにするための重要な資料として、積極的に新聞の収集をすすめました。横浜は関東大震災や空襲によって被害を受けています。都市化が進んだため、歴史資料の散佚が激しい地域であると言われています。新聞についても地元に残されたものは少なく、日本各地や外国にある新聞をマイクロフィルムで収集してきました。ここでは、当館が収集した新聞にまつわる話を、何回かにわたって紹介したいと思います。

『京浜通信』

大正一三年（一九二四）二月柏崎町六丁目三四番地になっています。二周年記念号発刊に際して柏崎が書いた記事や、「復興事業実施期に入り市民は一段の努力と覚醒を要す」と題した有吉忠一市長の震災復興に対する抱負をのせていました。また、大正一七年末の公園復興計画についての記事も出ています。

『日本商事新報』

日本商事新報社（のち日本商事興信所）が発行した市況を報告する新聞です。初めは週三回、のち週二回発行されました。出版地は横浜市北仲通三丁目になります。一五六号（大正一五年一月二二日）から六六二号（昭和七年一月一日）までのうち一〇六号分の寄贈を受けました。なお、脇沢家から寄贈された新聞・雑誌については、夏以降に公開する予定です。詳細は、「横浜開港資料館紀要」第一八号所載の目録をご覧ください。

(上田由美)

▼展示

- (1)「歴史資料への招待－受け継がれた横浜の記憶－」 5/3(水)～7/30(日)
 - (2)「咸臨丸の太平洋横断－遣米使節140周年－」(仮称) 8/2(水)～10/29(日)
 - (3)「歴史を集めむぐ人々－史料保存と編さんの歩み－」(仮称) 11/1(水)～平成13年1/28(水)
- 日本人最初の太平洋横断を成し遂げたサムライたち－木村撰津守、勝海舟、福澤諭吉らの軌跡を、木村家の資料を中心に描きます。

- (4)「絵葉書で見る100年前の横浜・神奈川」(仮称) 1/31(水)～4/22(日)
- 震災や戦災、社会変化の中で日々と続けれられた歴史資料の収集保存と歴史編さん事業の歩みをたどり、横浜開港資料館設立の前史を明らかにします。

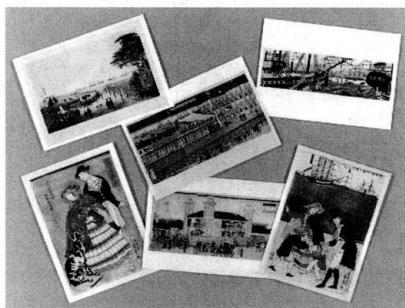
- (5)「100年前の横浜・神奈川－絵葉書で見る風景」が好評発売中

- 今から100ほど前に誕生した絵葉書によって、関東大震災や戦災、戦後の開発によって失われた20世紀初頭の横浜・神奈川の風景を再現します。

▼寄託資料

- (1) 金井家資料 101点（金沢区朝比奈町金井佐衛樹氏）

資料館より



▼新絵葉書6種を発売

当館所蔵資料の「ペリー提督横浜上陸の図」や、横浜浮世絵を題材とした絵葉書をこのほど作成・発売しました。いずれも1枚100円（本体価格）ですが、5枚だと400円になります。新館1F受付でお買いもとめできます。

▼館長交替

4月1日付で、横浜開港資料館長が安田岩男から吉川春二に交替しました。

▼6月2日(金)は、横浜開港記念日のため、入館料は無料となります。

▼『100年前の横浜・神奈川－絵葉書で見る風景』が好評発売中

横浜開港資料館が海外から収集した彩色絵葉書をはじめ、県内のコレクターの所有する絵葉書などから1,200枚を厳選し、関東大震災や戦災、あるいは戦後の高度経済成長期の開発によって失われた風景を再現。古き良き時代の横浜と神奈川をあざやかに蘇らせています。

横浜開港資料館編、有隣堂発行。A4判変型352ページ。平成12年9月まで8,190円、以後8,925円（いずれも税込）。

休館日等のお知らせ

月曜日および5月9日(火)、8月1日(火)、9月26日(火)、10月31日(火)、11月24日(金)、年末年始(12月28日(木)～平成13年1月4日(火))、1月30日(火)は休館させていただきます。

なお、閲覧室は、上記のほか5月31日(水)、6月27日(火)～6月30日(金)、8月31日(水)、10月31日(火)、11月30日(木)、1月31日(水)、2月27日(火)～3月2日(金)も資料整理のため休館させていただきます。